

## 十勝の山女魚



型は決して大物と言えものではなかったが、この時期の山女魚は瀬で掛かり激しい抵抗を見せた。丸々と太ったその魚体はまさに北海道の溪流の王様と言えらるう。楽古川は十勝の南、広尾町に河口を持つ中河川。その上流までダムらしい堰堤も無く、7月の解禁当初の下流域が面白い。昨年のお盆過ぎには中流域の古い堰堤の溜まりにサクラマスが群れていた。

## 幅広の登る川



もいた釣れポイントも話ほど言われ  
く、小魚はよく  
なら川はと  
なっこの間が全  
もな3年間場所  
量とこの量は、  
普通はないと水  
で、この量は、  
流れるが、と水  
の極端な時期は  
沢の間は流る。普通はないと水量も少な  
の区間は川はと  
支の区間は川はと  
川の区間は川はと  
留の区間は川はと  
猿の区間は川はと  
った、魚釣りに初めて  
釣った、魚釣りに初めて  
を釣った、魚釣りに初めて  
魚を釣った、魚釣りに初めて  
女魚を釣った、魚釣りに初めて  
山魚を釣った、魚釣りに初めて  
広山女魚を釣った、魚釣りに初めて  
幅限に僕りるが、この川を知って初めて





阿寒川は阿寒湖の水が水源である。日本でも有数の水生昆虫の多い河川と言われている阿寒川だが、下流の通称ピリカネツプのダムに川が挟まれかつての様に山女魚やアメマが遡上する河川ではない。

しかし阿寒川はその流れの美しさは他の河川の比ではない。河原の少ないチョークストリームの流れ。水中には梅花藻が沢山生え、周辺の木々の緑と共に溪相もよい。北海道では数少ない漁業権のある河川で、放流も行われているが残念な事にネイティブ魚は現実では皆無と言っても良いだろう。それだけに釣り人は体長制限や捕獲匹数などルールを厳守すべき釣り場である。

## 西別川の秋



可愛いレインボウ



激しい抵抗をみせるネイティブレインボウ

道東地方有数の観光地、摩周湖の伏流水を水源とする西別川。周辺は、既に開発の波が押し寄せ深い森は切り開かれ牧場が広がる。しかし、河畔林は残り、護岸工事も殆どなく河川は一定の自然が残っている。

下流域が保護水面になっており、釣りが出来るのは中流～上流の本支流のみ。今年の夏に初めて訪れた西別川は、河原を持たない典型的なチョークストリームの流れである。道東地方の絶対優位魚種であるアメマスが9割以上を占めるが、西別川は世代交代しているレインボウが生息している。勿論、レインボウは北米産の魚であり、かつて放流された末裔が、今日まで世代交代しているのである。

写真は激しく抵抗をみせる、ランディング途中のレインボウ。40cmを少し超える個体でネイティブの証拠に、バイトした瞬間連続ジャンプをみせた。山女魚と並んで北海道は人気のある魚である。

## 別寒辺牛川



厚岸に河口を持つ別寒辺牛川（べかんべうし）の初冬の流れ。

湿原を自由に蛇行して流れる別寒辺牛川は、幻の魚と呼ばれるイトウの生息が伝えられている。  
中流域までは流れは遅く、溪流とは違う雰囲気を持つ川で川底も泥といつも溪水を見ている釣り人には何かしらの違和感を感じる。

ルアーを投げ、ゆっくりとしたリトリーブを繰り返していると、水底から突然アメマスが浮かび上がりルアーにアタックしてくる。  
このアメマス釣りが溪流釣りなのかは、人それぞれだと思うが岩魚が降海して巨大な大きさとなるアメマスは、溪流とは違う魅力を感じてしまう。



崎無異川（さきむいかわ）は知床の河川の中でも穏やかな溪相をしている



薫別川（くんべつかわ）は下流から上流に至るまで変化に富んだ溪相

知床半島の溪流と聞くと、海岸の崖から滝となって流れ出る荒々しい溪相を想像するかもしれない。しかし、知床にも穏やかな溪もあれば河口が滝の様な山岳溪流もある。また忠類川や斜里川の様には流程の長い比較的大きな河川もあれば、名も無き小さな流れもある。そして、その河川の多くにはオショロコマが生息している。山女魚は一部の河川でかろうじて生息しているものの、砂防ダムなどの構築によってサクラマスが遡上出来ない河川が多く、数は少ない。自然の宝庫と言われる知床だが、河川の環境に関しては、北海道の多くの河川と同じように開発という名の自然破壊が行われているのが現実だ。いまだ魚影の濃い知床の溪流だが、10年前の魚影の濃さと型と比べるとあきらかに悪くなっている。以前は河口付近を遊ぶだけで十分に楽しむ事が出来た。林道から竿を出しても、オショロコマと遊ぶことも出来たのだが。

## オショロコマ



オショロコマは、日本では北海道にしか生息していない岩魚の一種である。同じ北海道に生息する岩魚（アメマスの陸封型）は、白い斑点のみを持つ岩魚なのに対して、オショロコマは体側にルビー色の斑点を持つ。

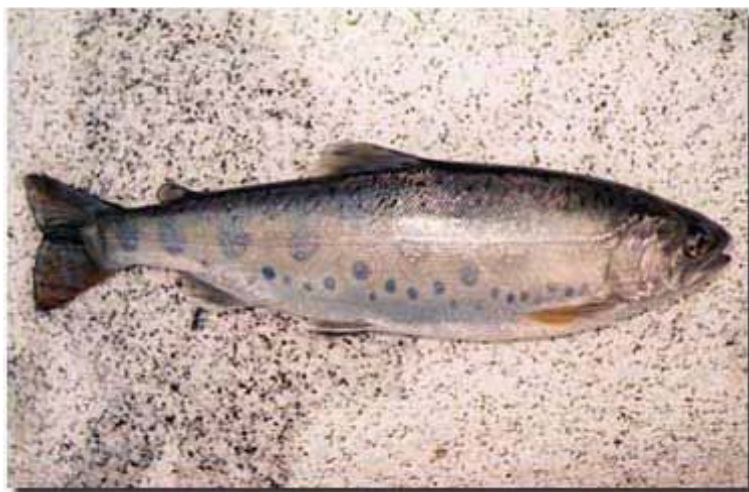
生息域は道央の河川の一部と大雪山～日高山脈から流下する河川上流域、然別湖、そして知床を中心とする道東が主な生息域。知床を除き、河川上流部に完全に陸封されている魚種であるため、乱獲が絶滅の危機につながるの言うまでもない。



## 歴舟川



歴舟川は日高山脈から流れ出る大きな単独河川で、たくさんの支流を持つ有望河川の一つ。釣り人の人気も高いが、函や川通しには遡行不可能の場所も多い険しい河川で入渓不可能と思われる場所も多い。また釣り場の殆どは河川規模も大きく、道内で多く使われる4.5m前後の竿では、短すぎて釣りにならない場所も多い。全支流を通し、長い瀬と大きな淵が交互にある溪相で、山女魚狙いでは瀬を、ニジマス狙いの釣り人は淵を好むようだ。下の写真は支流ヌビナイ下流の瀬で掛けた夏山女魚。均整なその姿と幅の広さは、川の豊かさを感じる魚体だ。



## 早春のアメマス



体をくねらせながら抵抗を続けるアメマス



ようやくランディング

早春のアメマス釣りは、氷が開いてから雪代が流れるまでの期間が、シーズンとされている。実際に雪代の増水で海に下る個体が多い様で、夏の間は生まれて間もない小さなアメマスが淡水域で生活している。  
ニジマスの様なジャンプを繰り返すわけではないアメマスだが、50cmを越えると極めてトルクフルな抵抗を見せ、そのファイトは捨てたものではない。

## 虹別にて



虹別付近は水深も浅く、魚も小さめだが美しい溪流が魅力的だ

別海町に河口を持つ西別川は、道東の河川の特徴である河原がなく激しく蛇行を繰り返す川だ。しかし、上流域は河原こそ少ないものの、水深も浅く流れも速い溪流となっている。摩周湖の伏流水を水源とし、スプリングクリークの名に恥じない透明な溪水が流れる。バイカモも多い為、ポイントは無数にあり魚影も濃い。魚は小さめだが時には良型の魚が出ることもあり決して侮れない流域なのだ。



夕方、気温が下がってくると水面に霧がかかり幻想的な雰囲気となる

## 虹別にて2



この日の最大は35cmのアメマスであった

西別川上流域は魚の種類も多い流域だ。道東の優勢魚であるアメマスとイワナを始め、山女魚と自然産卵のニジマス。北海道にしか生息していないオショロコマ。様々なポイントを丁寧に探れば、五目釣りも可能なのが嬉しい。最上流域にある鮭鱒孵化場近くではブルックトラウトも生息しているらしいのだが、残念な事に孵化場下流の橋から上流部は周年禁漁となっている。しかし、禁漁になっているからこそ魚が守られている事も否めない。釣りは出来なくても明治時代に移植されたというブルックトラウトが、今も生き抜いている流れがあるというだけでも嬉しいものだ。



西別川で初めて釣れたオショロコマ

## 初冬の別寒辺牛



別寒辺牛川流域の湿原

別寒辺牛川の流域には、パイロットフォレストに囲まれるように大小の湿原が広がっている。湿原の始まりは浅い沼と言われており、長い歳月にわたって湖底に土が溜まり、やがて葦などの植物に覆われる。更にはヤチダモなどの木が進出して何百年、何千年か後には湿原は消え、林となっているのかもしれない。釧路湿原に代表される道東の湿原は気候と周辺の地質のバランスの賜であり、湿原を横切る数多くの川に恵みを与えているのだ。



道東の冬は晴天が極めて多い

## 釧路川のアメマス



釣り人の数は多いのだが釣れている気配がなく、果たして釣れるのかとの不安を抱きながら釧路川で竿を振った。川岸は厚い雪で覆われており、例年の雪の少なさを知る人間にとって記録的な大雪だったことが判るだろう。

流れは湿原流特有の重さを持っていて流心の流れは速い。5 cm程度のシンキングプラグではラインのドラッグにより簡単に浮いてしまい底を流すのは、かなり困難だ。

ハスルアーに替え、心持ち上流へキャストしてドリフティング。流心を横切らせ、長いフォーリングを入れながらリトリブすること十何回。ラインが張った様なアタリにロッドをあおると根がかりか？と思う様な手応えがあった。

フッキングした直後、底に張り付いていたのだろう。やがて上流に向かって、ゆっくりと走り出し魚であることが判った。やがて姿を現した魚は40cm 前後のアメマス。大きくも小さくもない平均サイズといった魚だが、重い流れに育ったからなのか引きはトルクフルで力強い。この後、一回のアタリがあったのだがフッキングせず。

しかし、この一匹で満足した今年の初釣り行だった。

## オショロコマの溪



初夏の十勝の溪流 ニジマスとオショロコマが生息している

十勝の溪流は広く明るい溪流が多い。落差も最上流域や一部の河川を除いて少なく、典型的な北海道の山女魚川の様な雰囲気を持つ。しかし、砂防ダムなどの人工物が多数、構築されている川が多く、山女魚は放流物以外は生息していない川もまた多い。このため、圧倒的な優位魚種は放流されたニジマスで十勝と言えばニジマスと言われるのは、ある意味で悲しい話だ。しかし、川によってはオショロコマが溪に生息しており北海道のネイティブが守られているのは嬉しい限り。写真のオショロコマは、ミノーに果敢にアタックしてきた十勝のネイティブ。痩せて細長いイメージがあるオショロコマだが、比較的水温が高く餌も豊富なためなのか体高ある綺麗な魚だった。



ミノーにアタックしてきた9寸の良型オショロコマ



鱭と鰓蓋の一部が綺麗な黄色に染まっていた 別寒辺牛川支流

溪流に住む岩魚は場所によって同じ種類とは思えない程、体の色や斑点の形を変える。これはランドロックされてからの年月が長い程、その変化も大きい。反面、北海道に生息する岩魚は基本はアメマスの残留型であり多少の違いはあるものの湖沼を除いて、その姿を大きく変えることは少ない。

それでも同じ川、同じ時期に同じ魚を釣っても姿が違うなど思うことも多くアメマスに限って話をすると斑点の大きさや数、間隔。魚体の色等に個体差があるようだ。

写真のアメマスは鱭と鰓の鮮やかな黄色が特徴的で釣り上げた時、おや？と思った程だ。どちらかといえば油絵よりも水墨画が似合うのがアメマスだと個人的に思っている。しかし鮮やかな鱭をみていると、その考えはアメマスに失礼かなと思ってしまった。



## 十勝のニジマス



降雨による濁りで釣りにならないと諦めていたところ、分流は比較的澄んでおりプールの底も、かろうじて見える場所があった。ダウンの岸際めがけてラパラをキャスト。数回のトゥイッチにたまらず飛び出してきたニジマスの姿が見えた。野生化している証拠のジャンプを連続三回。やがて寄ってきたニジマスは、ヒレも伸びた均整の取れた体をしていた。

## 秋のヤマメ



橙色に染まった秋のヤマメ ミノーを果敢に追ってきた

かつてヤマメを専門に狙っていた頃、釣りシーズンは8月一杯と心に決めていた。9月に入ると婚姻色が出て可愛そうと思う気持ちが少しと、秋に禁漁のない北海道の溪流に対する自主規制という気持ちがあったのかもしれない。

それ以上に7月の幅広の白銀色のヤマメこそ、好敵手と考えていたのかもしれない。サビの取れていないシーズン初期や婚姻色が出てくると、それは釣りの対象ではないと真面目に考えたこともあった。

しかしヤマメ釣りを離れて、久しぶりに見た秋のヤマメは紅葉の様に色鮮やかで暫し、その姿を見入ってしまった。幅広の様な華麗さは無いものの、婚姻色の出たヤマメも美しい。



広い河原を自由に蛇行して流れる



海アメの様に砲弾型をしているのが遡上アメマスの特徴

春のアメマスと違い、道東地方の秋に釣れるアメマスは、太った姿と引きの強さが魅力だ。反面、遡上のタイミングが全てで、魚群に当たらなければ絶好のポイントも不発に終わってしまう。もっとも、湿原を流れる川というのは入渓場所が極めて限られている事が多く、大場所は多くの釣り人に攻めきられている。大場所は捨て、小場所を狙えとは、入渓者の多い川を釣る時の心得の一つだと思う。

ところが釣り人というのは、絶好のポイントから魚を釣り上げる事を夢見ている人種が多く、駄目かもしれないと思いながらも、その大場所を攻めるものだ。僕も御多分にもれず、大きな倒木周辺や淵などは丹念に攻めてしまう。

この釣り人の願望を比較的叶えてくれるのが、湿原河川のアメマス釣りだ。アメマスはその場所に居着いているわけではなく、秋は上流を目指しての遡上中。

前日、魚が群れていたポイントが空になっている事も珍しくなく、結局はそのタイミングを掴む事が全てだ。もっとも、これも半分以上は運なのではあるのだが。



河原のない湿原を流れる川に秋が訪れた

流域の多くが湿原となっている別寒辺牛川も場所によって河畔林に囲まれている。パイロットフォレストはカラマツの人工林で味気ない面は否定出来ないのだが河畔林は古来からの紅葉樹。10月に訪れた別寒辺牛川は紅葉が始まり、静かな水面にその色が映えていた。

二週間前は青々としていた葦も薄茶に色付きはじめており、日増しに秋の色を濃くしていく。半月も経てば、湿原は茶に染まり木々は冬支度をして、残された唯一の緑は河畔林の笹だけとなる。紅葉は季節の移り変わりと共にシーズン終了を釣り人に教えている信号の様だ。

## イトウの悪食



写真では、吐き出ししかかっているがルアーを丸呑みしようとした

イトウは極めて悪食だと言われている。川を泳ぐネズミを丸呑みしたなど、様々な話が語られている。ネズミを食べているというのは本当の事らしいのだが、ネズミを食べる事の出来る大形の肉食魚が他にいない北海道では、ネズミを食べるからと言って悪食だと言うのは、如何なものだろうと僕は思う。

こんな事を考えたのは、今回のアメマス釣りで釣れたイトウと、昨年同時期に同じ川で釣ったイトウの事を思い出したからだ。狙ってイトウを釣っているわけではないので、専門に狙う釣り人からは、当たり前だとお叱りを受けそうなのだが、イトウというのは極めて悪食なのではなく、極めて泳ぎが下手なのではないのかという事だ。

今年（写真のイトウ）のイトウはダウンクロスにキャスト後、スロー気味にリトリブさせた後の長いポーズで喰ってきた。昨年イトウは、殆ど使う事のないサスペンドミノーを、比較的流速がある深みで、これまた文字通りサスペンドさせた直後に喰ってきた。決してファーストリトリブとは言えない釣り方をしていても、イトウが掛かる事は殆どないのだけど、引いていない時だけに二尾掛かったという事実がそんな事を考えた理由だ。ベイトフィッシュと呼ばれる餌となる他の魚はイトウはなかなか食べる事が出来ず、泳いでいるネズミなどを食べざるを得ないのではないのか。

実際には、様々な理由（ネズミの補食は興味深い話を聞いた事があるのだが、長くなるので、ここでは割愛する）があるとは僕も思う。それにネズミだけを食べて生きていける程、ネズミが多いわけではない。実際には、様々な魚や川エビなどが餌の殆どであると僕も思う。しかし、ルアーへのアタックを考えると、イトウという魚はアメマスなどの魚に比べて、多くの餌となる魚や川エビ、昆虫などを必要としているのではないだろうか。餌を追って、補食出来ない事も多いのではと思うのだ。

## ウィンターラン



白銀色に輝く、遡上直後のアメマス

ウィンターランのアメマスも個体差があるのだが、写真のアメマスは銀鱗に覆われたとりわけ綺麗な魚体だった。またアメマス特有の白斑は、過去の写真を見比べると大きさや形が様々で面白いものだ。越冬の為の遡上と言われている為、産卵後の痩せた体ではなく、丸々とした魚体も特徴の一つで中型ながら、その走りは下手なニジマス遙かに凌ぐ。

幸いな事に道東ではアメマスは未だに健在で、放流などによる交配は皆無と言ってよく、降海性があるとはいえ、その土地で純血が守られているような気がする。北海道とはいえ、ヤマメなどは既にネイティブとは言い切れない状況にあるのだがアメマスを始め、オショロコマやランドロックされたイワナなど真のネイティブだと言えるのは、イワナとイトウというのは寂しい限り。

## 十勝川2001



十勝川のアメマス

遠征続きだった今年（2001）の釣りも終盤を迎え、納竿も間近となった11月下旬に十勝川で竿を振った。ホームグラウンドの釣りとは違い、広い川幅と規模は十勝大陸という言葉に相応しい母なる大河であるのだが、釣りとしては流れのある湖という感じであり、で底を取りながら広い水面を探っていく釣りを強いられた。

普段、比較的小規模の湿原河川を歩き、ポイントは倒木下と岸際のえぐれを丹念に探るという釣りをしている為、この広い水面を目の当たりにして戸惑いがあったのは事実だが、200米を優に超える川幅を全て攻められるわけもなく、地形や水底の状態を予想し、魚の溜まっている場所を探すのは小規模の河川と変わる事はなかった。



広い川の向こうに陽が沈む

## 河口開幕前



氷が開いて見えるが、全て結氷している河口域



ミノーにアタックしてきたアメマス

数日前、釣友から河口が開いたとの情報を貰い、様子を見に出かけたのだが週末からの冷え込みで河口は厚い氷に覆われていた。暖冬とはいえ、少しでも寒気が入ると真冬日となるのが道東地方なのだろう。

これから雪代の季節までの間、解けたり凍ったりを繰り返したあと、本格的なアメマスの降海が始まる。海に入る直前、汽水域で身をならす為、河口は絶好のポイントの一つとなるのだが今日は河口域が釣りにならない為、釣友と共に上流へ向かった。

流れのある本流は大部分が開いており、ポイントを探しながらの歩く釣りとなるのだが、岸は足跡が点々と連なり、入渓者の多さを物語っている。魚はスレていると考えたのだが、溜まりを狙うと元気にミノーにアタックしてくるアメマスもあり、数匹ながらも楽しめた今年の初日となった。



## 河口域の釣り



ようやく氷の開いた河口域



河口で釣れたアメマス 越冬のサビもとれ、銀色に光っていた

季節柄、河口域のアメマス釣りは人気が高い反面、時間帯や干満によって釣果が大きく異なる。例え、釣れなくても魚が居ないとは言えないのが河口の釣りでもある。

昨日、釣友と二人で河口で釣りをしたのだが、アタリが僅かに一回のみと惨敗に終わり翌日の朝、雪辱戦に出かけた。

駐車場所から釣り場へ向かう途中で3名の釣り人とすれ違った。まだ釣り終える時間としては早いのだが、結果が思わしくなかったのだろうか。

予想に反して、スプーンからミノーに替えた第一投でヒット。川のそれとは違い、背中が緑に染まりかけ、魚体の色も薄く明るいアメマスだった。イワナの特徴である尻と腹鰭の白い縁取りがとても綺麗だ。水に放す前、アメマスを暫し見とれてしまった。

## 大雪ダムの初夏



満水の湖は水際まで木々が生い茂っている



大雪ダムのオショロコマ 全体的に白っぽく、体高ある魚体の特徴

6月中旬、石狩川上流にある大雪ダムを訪れた。ダム湖であるが故に水位の変動も大きく、水量によってその風景も全く異なる。今はちょうど満水の季節。減水時に表れる土むき出しの山肌も少なく、新緑の木々が湖水に映るその姿は、自然湖の様な美しさをもつ。

アメマスとオショロコマが事実上の生息魚種。かつてはニジマスが放流された事もある大雪ダムだが、厳しい自然環境に定着が出来なかった様だ。また近年は魚の小型化が進んでいる様で、河口域のアメマス釣りとは趣を異にする。オショロコマは河川のそれとは違って全体的に白っぽい姿をしている事と体高のある個体が多いようだ。

## 南十勝の溪2002



南十勝の溪流は広い河原と緩やかな蛇行が特徴



荒瀬でスピナーに食いついたイワナ

数年ぶりに南十勝のある溪を訪れた。規模の小さな単独河川であるものの、かつては大形のヤマメやイワナの魚影が濃く、訪れる度に良い釣りが出来た川だ。最近はこの釣り場も車で行ける場所は既に何人もの釣り人が歩いた後で、昔のような釣果を望むのは難しくなってしまった。足が遠のいてしまった理由も釣れなくなったという事もあるのだけれど、久しぶりに歩いた南十勝の自然は、数年前と変わることはなかった。往年に比べると釣果は寂しい限りだが、瀬音を聞き、周辺の緑と日高の山々を眺めながらの溪流釣りは、それだけでも訪れる価値があったと強く感じた。



アメマスの遡上する川 十勝から根釧地方はアメマスが上る川が多い



瀬に潜んでいた遡上アメマス

道東の夏になると通っていた溪流から、足が遠のく。夏枯れという理由もあるのだがカラフトマスを狙った遠征が続くため、一時的に海に通い出すためだ。お盆の頃を過ぎ、カラフトマスも後半戦となる頃、鮭やカラフトマスに混じってアメマスの遡上も始まる。道東を流れる川では早春、氷が落ちた頃に海に下りだすアメマスだが、同じ川で数カ月後に再びアメマスの姿を見る頃、北海道の短い秋を感じてしまうのだ。下りとは違い、餌の豊富な海で育った遡上物はコンディションも良く、太い魚体と餌と見るや即座に飛びかかってくる貪欲さは、春の釣りとは全く違う釣りを楽しめる。

## 瀬のアメマス



道東の川も山裾は瀬と淵が交互にあらわれる



瀬の底にある岩盤の切れ目に潜んでいた

アメマスは急流を好まず、緩い瀬や水深のあるプールに溜まる事が多いのだが、9月過ぎは既に産卵準備に入っている固体が多く、これらはなかなか口を使う事は少ないようだ。もとより産卵直前の魚を釣る気はなく、狙いは中流域の遡上直後のアメマスとなる。大形の可能性もある今時期も、緩い深みには既にカラフトマスやサケが場所を占領しているようで、その脇に産卵少し前というアメマスが群れている。狙いは瀬と決め、歩きながらポイントを探っていくと、岩盤底の切れ目から銀色に光るアメマスが姿をあらわした。

## 静寂の中で



体高ある魚体に水玉模様が輝く



ようやく木々が色付き始めた

9月最後の週、別寒辺牛川周辺はようやく木々の葉も色付いてきたようだ。葦はまだ青いままで日中の気温も20度を上回っていた。この季節の釣りは魚群のムラが著しく、その流域を如何に捜し出せるかの釣りになることが多いようだ。

入渓暫くは魚の反応も薄く、おのずと奥地へ足を踏み入れてしまう。踏み跡は薄れ、岸まで葦が張り出すような流れの中にアメマスは居た。体高ある魚体に白い水玉模様をまとったアメマスが必死に抵抗する姿が見える。その直後に辺りの静寂を破り、足下で水しぶきがあがった。



越冬遡上の個体は白銀色の砲弾アメマスだ



釣り終えて・・・

道東の川は、程度の差こそあれ河口は湿原となっている場所が多い。そして湿原とその冷涼な気候は、アメマスの絶好の住処となっていることが魚影の濃さでわかる。

潮の干満で大きく活性の異なる河口域の釣り。潮が動く時間は遡上したばかりのアメマスが水面に姿をみせボイルが物凄い。釣れる多くは35cm前後。大型の生息しているが、今回訪れた河口は中形が多い釣り場だ。おのずと数釣りを楽しむ事になるのだが、中形とはいえ砲弾型の遡上物は時期を考えるとその引きは一級品だ。場合によっては決して緩いわけではないドラグを鳴らして抵抗する。

大型の重厚は引きも魅力があるけれど、中形のスピード感溢れる引きもまた魅力一杯なのだ。

## 十勝川2003春



この日のアメマスはミノーへ良く反応をした



岸の向こうに広がる春の空気感

十勝川のアメマスも連休の頃となると、最下流域に群れが溜まる。比較的、気温が高い季節であり、厳寒期の釣りを敬遠している釣り人も集まってくるようだ。河川規模が大きく、かつ太平洋の干満の差は同じポイントの姿を大きく変える。遠征二日目、干潮へ向かう朝の十勝川は水位が徐々に下がっていく頃、魚もやる気を出してきたようだ。時折、大きな水音がして波紋が広がる。ルアーさえ届けば、着水しリトリーブ後のポーズに引ったくるようなアタリが出る。

ミノーイングにおいて、僕はこの瞬間・・・僅かな待ちの後に出るアタリの瞬間が好きだ。このような釣りが楽しめる十勝川も遠征という言葉が必要になってしまった。夕暮れの河口を後にするとき、そんな事が頭に浮かんだ。





ヤマメはまだ禁漁中しかし、その姿に思わず見とれてしまう



見事なコゴミの群落

西別川に生息する魚で釣りの対象となるのは、オショロコマ、ヤマメ、アメマス、ニジマスだろうか。優勢魚種は道東故にアメマスなのだが、下流と支流が保護水面に指定されている事もあり、ヤマメも非常に多い様だ。その魚影の濃さが理由なのか、ミノーを多用してもかなりの数が掛かってしまう。ヤマメの禁漁時期故、心苦しくなってしまうのは事実だ。そんな季節の西別川で、辺り一面コゴミが群生している場所があった。コゴミは流域に数多く見られる山菜の一つなのだが、毎年通っていてここまで見事な群落を見たのは初めてのことだ。新緑の季節に一気に葉を伸ばしている姿は道東の初夏を感じさせる。

## 2003夏～秋（カラフトマス）



台風通過後のオホーツク海



カラフトマス雄

例年、お盆の季節になると道北から道東地方の海はカラフトマスの話題で一色となる。釣り味とアキアジよりも上と言われる身の美味しさが人気の秘密だろうか。沖合を回遊するフレッシュなカラフトマスはスプリンターと形容されるほど、その引き味はスピード感に溢れている。群れに当たれば、何本ものカラフトマスが竿を絞り込み、文字通り腕が痺れてくる。

2003夏～秋（魚たち）



遡上直後のアメマスは水面直下のミノーに盛んにアタックしてきた



激しいトゥイッチにアタックしてくるとは・・・



背中模様は個体によって異なる

夏から秋にかけての遠征は、盆の頃のカラフトマスを除いてアメマス狙いの旅であった。大型狙いと考えていたのだが、本命河川の水量の無さと遡上タイミングを掴む事が出来ず、やむなく他の釣場へ転戦とあいなった。写真上から二番目は河口で釣れたカラフトマス。勿論、即リリースしたのだが、ミノーの激しいトゥイッチに反応したのは予想外であった。

## 秋の河口域2003



例年より季節が遅れているのか、まるで夏の空の様だ



越冬遡上のアメマスは健在・・・しかし魚影が薄い

例年、十月下旬に越冬遡上のアメマスを狙う遠征が恒例となっている。安定して数釣りが出来るのが例年なのだが、今年は他の釣り場でも感じたように秋の深まりが例年に比べて10日ほど遅い様な気がする。顔を出してくれたアメマスはいつも通りの太った魚体で、遡上直後は海の食性をそのまま引き継いでいるのかミノタイプのルアーに反応が良い。例年であれば、これが連発という事になるのこの釣り場は遠征距離もさることながら苦勞の多い釣り場でもある。車から釣り場までは原野を歩き、強風や潮汐、時には水面を流れる氷に悩まされる。それでも北海道に残された数少ない一級の釣り場であることは間違いない。魚が釣れるだけではなく、道東特有の寒々とした風景もその魅力の一つなのだ。

## 十勝川2003 秋



アメマスも川により顔つきが違うようだ



十勝川最下流の流れ 悠々と流れる大河である

ここ数年、シーズン最後は十勝川で竿を振ることが多い。好きな釣り場である小河川の河口域が凍っても、本流の太い流れは厳寒期を除いて竿を出すことが可能であり、シーズン最後の釣行に相応しい釣り場の一つだと思う。アメマスのみを考えると釣り場を海へ移してという魚ではあるのだが、十勝に10年近く住んでいた僕としては、結氷するまでがシーズンだと感じてしまうのだ。その意味でここ数年の十勝川での釣りは、シーズンを終える為の儀礼的な釣行になっているのかもしれない。

2004 十勝川 春



右にある砂州の向こうは太平洋である



シャープさを感じさせるアメマス



晴れの日のグリーンバック

十勝川の最下流域でアメマスを狙った。雪の少ない十勝地方では五月の連休を迎える頃、雪代も収まり春最後のアメマス釣りで賑わう。この時期に釣れるアメマスは海から差してきた個体も混じるのだろうか？。他の河川で釣れるアメマスと比べると全体的にシャープさを感じる個体が多い。

今年の十勝川は濁りに悩まされ釣果は今ひとつ。繰り返し濁った水面へルアーをキャストしなければいけない。一匹の重さを感じさせてくれる釣り・・・それが今年の十勝川であった。



2004 初秋の河口



台風襲来前 穏やかな天気の中、竿を振る



9月の遡上アメマス 団扇の様な大きく角張った尾びれ



今回の遠征での良型 52cmしかないが。引きはまさに暴力的だった

河口域の釣りは水量、潮位、天候、季節など様々な要因が絡む為、タイミングが非常に難しい。この時期は特にそれが顕著である。数が出ることもあれば魚一匹もいないという可能性もある。その意味ではリスクの高い釣場と言えるのかもしれない。その代わりに、魚が居ればアメマスのファイトを見直す強烈なファイトを楽しめる季節でもあるのだ。

## 2004 初冬の河口2



波打ち際まで鏡のような水面が開いていた



11月の遡上もの

二週間の間をあけ、2004年最後の遠征を行った。釣り場へ到着すると水面に氷が張っていたが、日中は一転、シャツ一枚でも汗ばむほどの小春日和となった。例年強風下の釣りを強いられるのだが、午前中はほぼ無風。水面は鏡の様に静まり、遠くで鳥の鳴き声が聞こえるだけだ。釣り場には数多くの足跡が残されている。恐らく、来年の春までその足跡が消えることはないだろう。雪と氷に閉ざされる日も近い。

2005～spring 5



朝焼けの海岸に釣り人が並ぶ



ショアから釣れたサクラマス

ショアに限らず、海で竿を振るのは知床でのカラフトマス釣りだけであった。今回、釣友に誘われ、道南地方でサクラマスを狙った。姿形は似ていてもカラフトマスの釣りとは少々釣り方が異なる。

いつ来るのか判らない群れを待ち、ひたすらキャストとリトリーブの繰り返した。一人、二人と脱落する釣り人が多い中で、ようやく釣れたサクラマス。

## 阿寒湖2005 春



ヤイタイ島にて



ジグで釣れた阿寒湖のアメマス

阿寒湖を訪れると、路肩や周辺の山々に雪が多く残されていた。気温の上昇も遅いようで、4月の河口域の釣りとは変わらないコンディションであった。最初は島で数匹の釣果を得たものの、日が昇るにつれてアタリが遠のいていった。次に訪れた釣り場は魚影濃く、岸近くと沖合に群がいるなど興味深い釣りだった。

道南釣行2005 (溪流魚)



道南のヤマメ



道南のアメマス



道南のイワナ

道南地方で釣れる溪流魚はヤマメ、イワナ、アメマスだ。それに一部の河川でニジマスが釣れるという図式は道内各地と大きく変わるわけではない。ヤマメは道北について魚影の濃い地域と言えるが、サクラマス増殖事業が盛んな地域である事も理由の一つだ。稚魚放流も行われており、手放しに賛成とは言えないのだが、砂防ダムへの魚道設置も道内各地に比べると比較的多い地域だ。道内では歴史があり、開発が進んでいる道央道南地方。道内で有数の自然環境と言われる道東の”辺境”知床半島。しかし、多くの河川に魚道の無い砂防がある。川だけを比べると、自然遺産登録は悪い冗談にしか思えないのだが。

道東遠征2005夏 (知床のカラフトマスPart2)



モイレウシ湾 岬方面の岩場風景



フレッシュラン♂ 白銀色の魚体が美しい





船上より眺める海岸線 うねりを疾走する舟からの撮影は困難だ

モウレウシ湾は、荒々しい海岸線を見せる知床先端部にある湾だ。川が流れ込んでおり一部は砂浜となっている。番屋の建物が数棟あり、渡船到着時は入り江に刺し網漁船が停泊していた。

知床も自然と釣果に満足し、帰りの舟で海岸線の景色を楽しんだ。波はないものの、うねりが出ており、疾走する舟の船首はバウンドが激しい。体全体がぶれる中での撮影はかなり困難であった。

## 2005 夏の終わりに



広い川原に淵と瀬が交互に現れる道南の溪流



大場所で飛び出す岩魚は体高のある個体ばかりだった

夏の終わりに、釣友と道南の溪流を訪れた。淵と瀬が交互に現れる流れは、多くのポイントを形成して飽きることをしらない。魚影も濃く、大場所には複数のイワナが岩陰に潜んでいる。流れにミノーを泳がせると、何匹ものイワナが飛び出してきた。

2005 ファーストラン



晴天下の日中にミノーにでた



スプーンを使うとヤマメが飛び出してきた



河口から30km近い上流域である



砂礫の中をゆっくりと流れる

8月になると道東河川の多くは、アメマスの遡上が始まる。明確な線引きではないのだが、夏の終わりと初冬の頃にそれぞれ遡上の山があるようだ。今年の遡上はほぼ例年通りのようで、平野・原野の河川ともに遡上したアメマスが竿を絞り込んでくれた。

2005 遡上アメマス



牧草地の向こうは太平洋と目指す川が見える



小型ディープダイバーにアタックしてきた



水際でリリースすると陸に乗り上げてきた

今年も道東のアメマス釣りが本格化してきた。既に多くの河川に多くのアメマスが遡上しており、鮭やカラフトマスに混じり群をなしている季節だ。しかし、今時期は場所を選ばないとアメマスは口を使ってはくれない。産卵が近づいたアメマスは、体は色づき、いつも以上の密度で群をなしている。

今回の釣行では、海から遡上直後の個体を狙った。やはり海から上ったばかりのアメマスは活性が高く、ルアーへの反応はすこぶるよい。この釣りを楽しむ為には、その川への遡上タイミングを掴む事につきる。今年は幸運に恵まれたようだ。

2005秋 阿寒湖



朝霧は陽が昇る前の演出でもある



朝陽に輝く阿寒湖のアメマス



阿寒湖にも確実に秋が訪れている

秋の阿寒湖は初めての経験だった。湖に立ち込んで、文字通りの杭になっていると足元には無数のワカサギが集まっていた。彼らにとって、動かない人間は身を守る為の隠れ家なのだろうか。



2005 道南の溪流 晩秋



晩秋の山岳溪流



魚影は濃いものの、バイトさせるのは一苦勞であった



紅葉と溪流

例年であれば、既に紅葉は終盤の10月下旬に山深い溪谷を訪れた。ようやく紅葉という感がある光景だが、生息しているイワナは既に越冬準備をしているようだ。盛期の貪欲さは既になく、ルアーを追う姿はオショロコマのように感じるほどだ。

## 2005 初冬のアメマス



初冬とはいえ、雪が降るまで秋の風景と代わりはない



細身、遠投が効くことが渋い時に威力を発揮する



産卵後の細身ながら綺麗な色をしていた

明け方の気温が氷点下となる時期がくると、秋のような数釣りは難しくなってくる。寒さに強い魚種とはいえ、冬は僅かでも水温があがる日中に活性が上がる事が多い。また、この頃には魚もスレており、なかなか口を使ってくれない。

2005 淡水ファイナル



コンパクトカメラでは限界があった十勝川のタンチョウ



大きな尾鰭が重厚な引きを生み出す



十勝川釣り風景 岸から深く、バックがとれない

フレッシュウォーターのルアー釣りは、今回の遠征で納竿となる。12月を迎えると、流水域でも結氷の心配が必要だ。今回の遠征でも早朝は無数の氷が流れていた。晴天は放射冷却をもたらし、この時期でも氷点下二桁になる事も珍しい事ではない。十勝川の下流はゆっくり滔々とした流れであり、水面が閉ざされる日も近い。

## 2005 ルアー納竿釣行



撮影した瞬間、波がアメマスを洗う



道南の冬もモノトーンの世界だ

日本海で竿を出すのは、今年3月のアメマス狙いと5月にサクラマスを狙った時以来だ。週末は荒れてくるとの予報通り、徐々に悪くなる天気との戦いとなった遠征で、今日は事実上釣りにならなかった。漁港へ退避するも魚影は薄く、仲間が一度バラしたのみ。昨日好調であった場所も10mを超える向かい風が吹き荒れており、風が弱くなったと思えば吹雪となる一日であった。

## 2006 冬の日本海



冬の海は時化早い



ジグに来たアメマス

宿を出ると、みぞれ混じりの雨が降っていた。一月中旬と言え、厳寒期にあたる季節である。気温は車載温度計でプラス6度。季節外れの雨の中、海岸で竿を出していると突風と伴った吹雪となり、さらには霰が顔を打ち付ける様になってきた。

寒冷前線が通過中なのだろうか。気温も徐々に下がり、波はどんどん高くなる。目まぐるしく変わる天候に戸惑う中、ジグにヒットしたアメマスをみて早々に撤退を決めた。



2006 道東 河口域の釣り



愛嬌ある顔つきをしている



寂しい風景だが、僕の大好きな世界の一つ



WANDER80と今回のBIG ONE

4月後半に道東の釣り場を訪れた。開幕間もない釣り場周辺には雪、水際には結氷の名残が未だ残されていた。初日は降雨の影響で、止水に近い河口域も濁りが入り、コンディションは良いとは言えない。しかし、魚影濃い道東のフィールドは、期待を裏切らなかった。スレ切ったフィールドとは違い、活性さえ上がれば大型のミノーに躊躇無くアタックしている。10日ほど前には氷で覆われていた釣り場も、水面が開くと一気にアメマス活性も上がるようだ。今回のフィールドでの釣果は殆どがシャロー・・・水面直下の釣りとなった。例年とは少々勝手が違う釣りに初め戸惑いながら、フローティングミノーとペンシルベイトを使い表層を意識した釣り。中型のアメマスではヒットした瞬間に水面が炸裂する。中にはジャンプを見せる個体もいる程だ。ある意味で今回の遠征はミノーイングに理想的な条件だったのかもしれない。長年同じフィールドに通っていても、同じ方法で釣れるとは限らない。どの釣り方でもそれは言える事だと思うのだが、それが釣りの奥深さなのかもしれない。

## 2006 雪代の季節



地図に記載されていない沢に滝がある



コンディション良好 夏には、優に尺を超えそうだ

5月の連休を利用して、道南地方を釣り歩いた。本命はショアからのサクラマス釣りだ。しかし、群れに恵まれず、やむなくイワナの領域へ足を踏み入れた。温暖な道南も山中に踏み入れれば、そこはまだ冬の雰囲気の色濃く残っている。林道は雪で埋まり、溪は青白く濁っている。水量が多く、ポイントが絞りきれない中、ミノーに出たイワナはサビが僅かに残る体高ある良型揃いであった。

2006 阿寒湖の春



阿寒湖のアメマス



恩根内



釣人

春の阿寒湖を訪れた。今年は解氷が遅く、事実上の解禁直後と言えるだろう。訪れた日の午前中、鏡のような水面に戸惑いながら竿を振る。魚信は忘れた頃にやってきて、釣り人は不意打ちを喰らう。厳しいと言える条件の中、鱒が回遊してくるのを諦めず待つ。教は最後の最後に女神が微笑んでくれたようだ。

2006 初夏 道南巡り



細流にも良型が潜んでいる



コンディションは上々だ



アメマスか？



腹部の斑点も明瞭だ



滝は釣り人を和ませる

地域によっては、竿すら出せないであろう雨が降ったあとの週末、Shinya氏と共に道南の溪を釣り歩いた。何処の河川も全般的に水量が多く、河原には増水した爪痕がしっかりと残っていた。

今回の狙いはイワナとヤマメだ。イワナは100%ネイティブでヤマメに関しては増殖事情の産物と言えなくもないけれど、釣りの為に放流された魚とは違う野生種である。



2006 初夏の山上湖



湖のオシロコマ特有の淡い斑点



晴れの山上湖は様々な表情をみせる



ここでは外道のサクラマス



湖周辺の山が美しい

然別湖のオショロコマは、ミヤベイワナという別名を持つ。河川に生息するオショロコマの亜種と言われている。河川のそれとの違いは、鰓のヒダが多いそうだ。プランクトンを主に食べている為、長い年月で進化したと言われている。外見はダム湖で釣れるオショロコマがそうであるように、河川に比べると色が明るく、朱点も薄いことが多いようだ。また、体高も比較的高めである。学術的な事はともかく、日本で大型のオショロコマを釣ることが出来るのは、然別湖のみ。降海型も僅かにいるようであるけれど、狙って釣れるほど個体数は多いものではない。

## 2006 道南遠征 夏



イワナ釣り以外でこのような溪を訪れる事はない



夏のエゾイワナ 勿論、完全なネイティブである

夏の道南を訪れ、竿を振った。基本的にはイワナの溪流が主体となったが、初日の午後はヤマメの溪へ。ところが、釣れるのはイワナばかりで、否応なしにイワナ釣りの遠征となった。

イワナも夏になると、瀬に出ている事も多く、そのような個体は全体的に白っぽい姿をしている。好みはあると思うが、僕はヤマメもイワナも夏の姿が一番美しく感じる。

## 2006 十勝川の釣り 2



1 2月の越冬遡上物



十勝の青空と荒涼の大地

十勝川の流域は、広い平野に畑がパッチワークの様に並ぶ風景だけど、河川敷のそれは道東特有の荒涼たる風景そのものだ。その景色は、冬になると更にその感を強める。

明け方の最低気温が一気に下がる12月。中流部であれば、更に遅い時期でも釣りは出来るけど、下流域の釣りは既に終焉を迎えつつあるようだ。ラインやガイドは容赦なく凍り付き、魚の活性も著しく低い。寒さに強いアメマスとはいえ、この時期は釣り人を苦しめる事が多い。

2007 道東河口巡り



東に生きるアメマスは、まるで野武士の様だ



ミノーの原色が違和感を感じるかもしれない



4月中旬の降雪も道東らしい

例年より一週間ほど開幕が早いと考えていた、道東河口域の釣り。確かに水面は開き、超過も数的には期待を裏切らない結果とはなった。  
しかし、予定外の降雪により、その釣り場の本来のポテンシャルはベールをかぶってしまったようだ。それでも、今年の釣りは非常にエキサイティングな物となったのは、BLOGへ記した通り。リップレスの早引きに、低水温で大人しくしていたアメマスアモマスの闘争心に火をつけたのだろうか。背鰭を出し、波しぶきを上げながらバイトしてくるシーンは、正に圧巻であった。

## 2007 阿寒にて



顔は金色、体は銀色に見えるのは気のせいだろうか



ヤイタイ島は、荒天の方が存在感を感じる

今年の阿寒湖は、スケジュールの大半が雨に見舞われた。体感温度も例年に比べるとかなり低い。こんな時でも釣り師は我慢強く、竿を振り続けているものだ。それが釣果という形で報われれば辛さは消え失せる。魚に出会えなかったら、次なる釣行を誓う人種が釣り師だと僕は思っている。今回の日程は初日午後半日、翌日は早朝から夕方まで。少ないながらも、魚に出会うことは出来たけど、今時期は道東の春らしい雰囲気の中で竿を振りたいかった。型や数も釣りの魅力だと思うけど、道東の釣りはそれだけではない”何か”が僕の中で存在しているのも事実だ。荒涼とした原野も道東だけど、森の深さを感じる阿寒の自然もまた道東なのだ。

## 2007 Mountain Stream Vol.2



落ち込み、岩、川底、頭上には木の葉 第一級のポイント



コンディションは上々





清澄な溪水が山岳溪流の魅力だ

山岳溪流を歩くと、達人の描いた水墨画の世界だと感じる。岩には苔が生え、清澄な水が小滝となって流れ落ちる光景は芸術としか言いようがない。標高が比較的低い山が多く、かつ冷涼な気候の北海道では、比較的楽にこのような流れの中で竿を出す事が出来る。その場所全てが魚影濃いとは言えない。しかし、場所を選べば、壺毎に魚のコンタクトがある流れも北海道には健在である。但し、楽なのは体力的な事であって、その場所を訪れる心構え・・熊への畏れを決して忘れてはならないだろう。

2007 世界遺産での釣り



モイレウシ 岬側の岩場



フレッシュな魚はファイト抜群



左水平線に見えるのは国後島



夏のファイター カラフトマス雄



崩れ滝 船上からでしか滝の全容がみえない



船上より ペキンノ鼻 付近

知床は昔から魅力溢れる土地で特に羅臼が好きだ。宇登呂は観光客（こちらも十分観光客なのだけど）には人気があるし、知床五湖をはじめとする景勝地も多い。その分、昔から人で賑わっている感があり、少し敬遠してしまうのだ。羅臼側は、観光地というよりも漁業基地としての雰囲気があり、素朴で人々も心暖かい。さて。

今年の知床は天候にも恵まれ、例年よりも鱒の岸よりが早いようで、訪れたポイントでは複数の鱒のファイトに酔いしれる事が出来た。日によって、ムラがあるのはショアの釣りだから当然の事。前半はまさに爆発的な釣果と聞いていたけど、個人的にはそこまでの数は望んでいない。一日を通して、二桁くらいのコンタクトがあれば満足出来る。理想的には僅かに爆発的な時間があれば、更に良し。朝から晩まで釣れ続けた・・・アメマスなら飽きはしない様な気がするけど、カラフトマスの釣りは目的の三分の一が釣りそのもの・・・彼らのファイトを堪能したい。もう三分の一が持ち帰って食べたい。最後の三分の一が知床の風景を満喫したいと考えているので、釣果はそこそこで僕は満足出来るのだ。特に知床の風景は重要な要素かもしれない。これが無ければ、カラフトマスの魅力は半減してしまう。サーフでの鱒釣りも魅力があるけど、知床は何と言っても自然遺産の中での釣りなのだから。

2007 初冬の十勝川 Part 1



初冬の十勝川 最下流域となる



アメマスの白玉模様は、日本的で飽きることをしらない

この時期恒例の十勝川の下流域を訪れた。好んで入るポイントは最下流に近い場所なのだが、この流域はこれから水面が覆われるまでが、アメマス釣りのシーズンである。前半は、産卵後の下りが主体だけど、結氷する頃になると越冬遡上と思われる銀ぴかの太いアメマスも姿を見せるようになる。

越冬群と思われるアメマスは、群れで移動する事から、当たれば大釣りも出来るけど、外れると単発で細い下りが釣れるだけだ。

それでも、基本的には蛇行など流れに変化があり、かつ水深のある場所に魚は溜まるようだ。この為、広大に見える釣り場も釣り人が集中するのは、やはり定番のポイントが多い。もっとも、それは車でアクセスしやすい場所に限定されているようだ。